

# 熊本近代文学館報

おまえの書くものは商売人の文章ぢやないかと谷川雁はよく書いたり喋ったりしていた。わたしの方は、おまえの文章は実際に何か運動していることと照合しないと何のことか分らないじゃないかといつもからかっていた。こんな好意ある悪口が通じるのは彼くらいで、器がよく通じ合ったからかもしれない。

もう一つお互に言い合う悪口があった。おまえはただの庶民吉本だと彼が口走ると、おまえはあの平面しかない毛沢東の垂流だからとわたしは言い返した。もちろん毛沢東は単なる官僚ではなく、一個の思想者だった。だが、二次元しかない平板的な理念の論理化は耐えられないと思っていた。谷川雁もまた単なる官僚ではなく、一個の詩人、思想者だった。だが彼の根拠地主義は日本の社会構成の高さを低く見すぎていて思っていた。かつてレーニンの『ロシアにおける資本主義の発達』を読んだとき、これはロシアの資本主義を高く見すぎていると感じたのと丁度逆だった。

の発達を過大評価したことと労農同盟という考え方とは関係があるのではないかとおもった。やがてスターリンまできて、またたく間にコルホーズ、ソホーズの国有、共同所有の集団農業化が完成してしまう。農民はじぶんの土地、その地形、場所に最も固執し、物神性をもつ存在である。その意味で超保守性を本質とする。それが最も正当な在り方なのだ。どうして都市労働者と手を結び、集団化や国有化を肯定するだろうか？レーニンはまだ理念だけを問題にした。だが、スターリンに至っては農民の本質の在り方を無視した。大地の神から反乱をうけたのは当然である。農民反乱を基底としてソ共の政権は崩壊した。

アジア的な根拠地理念は都市の労働者が超都市型に変わるときに危うくされるはずだ。そう想定できる。現在でも決定的に考え抜いているわけではないが、この種のことかもやもやと頭にある頃、谷川雁の考え方にいて新しい視方ができるような体験にぶつかった。

わたしの記憶はあまりあてにならないから、あとで修正するかもしれないが、谷川雁と二人で九州大学を皮切りにいくつかお喋りに巡廻したことがある。終ってから生れて一度も行ったことのない祖父父母や父母や、兄姉の郷里を見てきよと思っていたので、彼に別れると、熊本の知人の家に泊り、翌日水俣から船で天草の牛深まで渡った。ここはとも光と海の水の反射の具合がちがう。日光は光線というよりも、綿のような密度と厚味をもっていたし、海の水面は光がどろどろした流態のように思われた。前にこんな感じになったのは高知の浜辺で沖を眺めていたときだった。あれは暖流のせいだと感じた。だけどそのとき水俣の岸辺でみたものは何からくるのか判らなかつた。どこにも類形を呼びおこすものがない。ただ人間関係も建造物もだんだん遠去かって、小さくなる感じた。途中には地図などに記しようもない小さな島が無数に点在しているのにびつくりした。もうひとつ驚いたのは秋口の晴れた日の午後だったと思うが、白色光がまばゆく輝き、水面に乱反射してまるで異世界の豪華な白色光の中にいるような感じの明るさだった。ああこれが日本列島(ヤポネシア)の南西部における「海上の道」の彼方に描かれた柳田・折口のユートピアに至る想像上の道筋かと思った。ヤポネシア列島の東北部では晩秋の低い山や丘が鮮やかな原色のまま緑色から紅赤色までの多彩な紅葉に覆われる。それはやはりこの世のものとは思われない山上他

## 谷川雁のことなど



あき明  
か隆人  
もと本詩  
よし吉

### 第62号 目次

谷川雁のことなど

吉本隆明…1頁

蓮田善明「有心」―純粋な生―

永田満徳…2頁

シリーズ 我が青春の一冊  
「私の個人主義」

北山浩士…3頁

占領下の子ども文化展特別講演会

「未来を信じたとき」

松居 直…4頁

わたしはレーニンのロシア資本主義

おなじように類推すれば、谷川雁の

界のように感じさせる。これもまた列島の中央部のもやのかかったような秋の紅葉の季節では見られないものだ。この山上浄土の景観もまた金銀や宝玉で飾られたインド的な仏教の浄土とはちがうものだ。

わたしは友人に教えられていた二江の旅館で車を下り、荷物をあづけて、すぐにバスと戻った感じで鬼池の母方の親戚を訪ねた。

わたしはどうかやらの父祖の地を訪ねて、他界のまばゆい白色光の世界まで見せられたらしい。こんな世界で政治的な民衆運動するには、地面も天上も一緒にゆれるような根拠地論を理念のもとにするような考え方しか仕方がないのではないか。わたしははじめ

吉本隆明(よしもと・たかあき)氏

一九二四(大正十三)年東京都生まれ。祖父吉本権次、マサ、両親順太郎、エミ、長兄勇、次兄権平、姉政枝の七人家族は大正十三年まで天草で造船海運業を営んでいた。隆明氏は母のお腹の中で東京に転居。

東京工業大学卒業。「聖家族」「詩文化」「現代評論」「荒地」「現代批評」各同人を経て「試行」を主宰のかたわら、文化評論を展開。五九年(昭和三四年)「アクシスの問題」-「転向フアシストの詭弁」で第一回近代文学賞受賞。主な著書に「芸術的抵抗と挫折」「自立の思想的根拠」「擬制の終焉」「言語にとって美とは何か」「共同幻想論」等多数。

思ってもみなかった新鮮な視線から谷川雁の思想を理解できるような気になった。もう少し言ってみれば、へ何億年が経ったあとで、一度高句麗の浜辺に佇ってみたいものだ」という谷川雁が

### 蓮田善明「有心」

純粋な生

熊本市立必由館高等学校

教諭 永田

満徳



どこかで書いていた感懐が身に沁みるように感じられた。やはり父祖の地を詣でることを悔るべきではないかと本気にそう思った。彼はいまどのあたりにいるのだろうか。

「有心」は阿蘇の湯治場である宿に数日間宿泊したのち、阿蘇の火口を見るために登山を試み、火口の噴煙を目にしたところで終わる小説である。昭和十六年一月二十九日より一週間、阿蘇の中腹垂玉温泉に滞在した経験を踏まえている。

阿蘇の温泉に行くのは、「現実と自分の二枚の像が一寸ずれてゐてびつたりとしない感じ」、つまり現実との違和感を覚え、静養をすることによって「体を作り直」すためである。第一次応召で一年八カ月ぶりに帰還し、日本に上陸したとたんに、波止場で昏倒したという話からも類推できるが、(死は文化だ)と確認した戦場で培われた緊張の糸が内地の「もの倦い生活」によって断ち切られたことによる精神の変調だと考えてよい。

ともあれ、この現実と自分とのずれをどのように修復するかが「有心」の課題である。その課題を解決するのに、散策することもままならない狭い崖の上の宿は格好の場所だったといわなければならぬ。「火鉢によりついて、鉄瓶を眺めているよりほかはない」ところでの思索はもちろん自己の内部と向き合うこととなるが、しかしこの小説の「自分」はむしろ外部をよく観察し、精緻に分析する。この科学的な眼差しに捉えられた物は徐々に現実と自分の関係を明らかにしていく。その一つが「障子」である。障子というものが外界と内界を隔てるものでありながら、内外の均衡を微妙に保っていることに気付く。それは「無」という概念にあやうく達するもので、現実と自分との関係について一つのヒントを得

ることとなる。もう一つが浴客達の裸である。いうまでもなく、「皮膚」は障子における内と外との変奏である。浴客達の発育した肉体が「技巧の及び難い、天の作品、最も生きてゐる」のは、「天から与えられたものを純粋にはたらかせてゐる」からである。肉体それ自身が「純粋な生」そのものを謳歌しているようにみえる。この内と外を巡る思索の深化を手助けしているのが手遊びのために持ち込んだ鴨長明の「方丈記」やリルケの「ロダン」である。「方丈記」における隠遁が外界と関係を意識的に絶つことで、また「ロダン」における観察が外界の実体を浮かび上がらせることで、「純粋な生」といったものが導き出される。障子にしても、裸にしても、内と外を超越したところにこの「純粋な生の充ち溢れる」世界が現出することの暗喩である。要するに、「純粋な生」とは技巧を加えない、本然のままに生きる生を指す言葉である。「末梢的な感覚」におびやかされる(都会)から抜け出してこそ可能になる世界で、阿蘇という(田舎)にのみ見出される世界である。「有心」が(田舎)の発見というテーマを持つた作品であることは注意していい。その(田舎)を体現しているのはあの若い女である。湯船の中で誰に気兼ねすることなく遊ぶこの娘はまことに天真爛漫という他はない。まもなくのこと、

許婚の戦死の報を聞いて、誰憚ることなく嗚咽する娘の姿に、「不思議な調和」を感じるのはこの娘が「純粹な生」を生きたことの手本を示してくれているからに他ならない。その泣声を聞いて、「布団を頭からかぶると、ぶるぶるふるふる唇を噛んで咽び泣いた」のはまさしく娘の「純粹な生」に促されたことによる。そして、その「涙を拭つた」あと、「何か大きな軽さを覚えた」のも当然といえば当然である。

自分の内部に取り込まれた「純粹な生」が涙となつてほとぼしり出たときに、阿蘇登山を思い付くのである。

「純粹な生」を受け付ける場所として、阿蘇の荒涼たる風景と「激しい」噴煙ほどふさわしいところはなかった。この「激しさ」は自分と呼応するものであり、ここに至つて、完全に現実と自分のずれは修復されるのである。

とするならば、現実と自分のずれは「末梢的な感覚」を持ち込まないかたちで、戦場の緊張をそのまま内地に持ち込むことによつて解決したことになる。阿蘇登山の途中で戦場での感慨に耽ることからも理解できる。第二次応召の慌ただしい車掌室の中で推敲し、筆を置いたこともこの小説で掴んだ「純粹な生」が戦場と直結していることの何よりの証拠である。こう考えて初めて、保田與重郎の「この作品を読めば、彼の自殺は当然とも考えられる」とい

う直感の鋭さに思い至ることができる。従つて、「観念小説とはまつたく別の発想において、抽象とか思想といふものがどういふ状態で生まれるかを描かうとしてゐる」という桶谷秀昭の指

シリーズ 我が青春の一冊

夏目漱石著

私の個人主義

北山浩士  
熊本県社会教育課長



摘を参考にするならば、「有心」といふ小説は(田舎)に見出される「純粹の生」を思维的に追求し、思想にまで高めた作品だといえる。そこに「有心」のユニークさがある。

学生時代にヨーロッパに遊学したことがある。フランスはロワール川の古城巡りの拠点であるトゥールの語学学校で、九ヶ月の学業生活の末に及第点ぎりぎりです修了証書をもらつと、その後の二ヶ月間はバックパックを背負い、三日に一晚は寝台列車で過ごすという楽しい放浪をした。そして、その報いという訳でもなかるうが、帰国した後、一年半後に待ち受けている生業の選択に向けて悩むこととなった。そんな時にこの本と出会つた。

遊学は折しも湾岸戦争が始まり終わった季節と重なつていた。授業中も放浪中も、諸外国の様々な人たちとすれ違つううちに、否が応でも、曖昧な日本人である「私」を意識化・相対化する必要が生じ、悩んだ。その悩みを理解す

るための形式を求めたのだからか、文明開化期に英国に留学し、神経衰弱に悩むほど悩まされたらしい先人が、小説という形に依らず紡いだ言葉に頼ろうとした。学者の道から作家の道に進んだ彼の人生にも、憧れていたように思う。

この本は夏目漱石が行つた五本の講演の記録である。そして、私にとつては、それぞれの講演が自分の進路との関わりで示唆に富んでいた「我が青春の一冊」である。「道楽と職業」で研究者への道を諦め、「現代日本の開化」「中身と形式」で大学入学時には思つてもいかなかった公務へと志し、「文芸と道徳」で倫理的バランスの取り方の入門編を学び、「私の個人主義」で自己本位という考え方の厳しさを知るこ

とができた。総じて言えば、若年期にありがちな懊悩と未決断の状態から少しではあつても抜け出すことができたのは、この本のおかげだったような気がする。

「智」と「情」の如く、対極にあるもの同士が、それぞれに特有の長所と短所を備えている。曖昧に考えるとそれらが入り交じつてしまい、いざという時に他者本位の決断か、若しくは未決断に陥つてしまう。ただ、双方を真剣に見つめた先には、自己本位による価値判断の世界が広がっており、「自分のためにすることはすなわち人のためにすることだ」という哲理をほめかしたような文句(「道楽と職業」)から信じ、行動することができるようになる。

今回、改めてこの小冊子を読み直してみたところ、自分が、職業に限らない生活の諸局面で留意している規範の多くが、この本に書かれていたことを再発見し、驚いた。同時に、自分は、頭では理解しているはずの規範を体現できていないことを思い、反省することしきりだった。ただ、今更ながら、若年期の読書は精神の原型を鍛えあげするための最高の経験であることを確信した。

そして、今、翁の如く、外国と熊本を体験する機会に恵まれた自分の幸運を噛み締めている次第である。

今、ご紹介いただきました松居でございます。私は、編集者で自分は研究者だと思つたことはありません。ただ、出版の編集をしておりまして、こういう過去の本を見ますと、この時代の人たちが、どんなに苦勞されたかということをしみじみ思います。紙だとか、印刷だとか、製本だとか、あの戦後の何も無いときに、あれだけのカラーの印刷をするのにどれほど編集者が走り回つたのだろうか、というように考えます。それも全部、やはり未来を信じてやつてらしたんじゃないか、というふうに思います。

アメリカのライブラリー・オブ・コングレスの児童資料室長をしていらつしやるヤークシユさんが、一九七七年五月に東京の国会図書館で講演をされました。その講演の後、一緒に晩ご飯を食べておりました時に、ヤークシユさんが「メリーランド大学に、日本の子どもの本があることを知っていますか。実は、マッケルデザイン図書館に占領期の日本の子どもの本が約八千冊あります。」とおっしゃったんです。私はびっくりしました。八千冊！日本の国会図書館にもそんなないよ、と思つたんです。当時、マッカーサーの総司令部が、日本のおよそ活字になつていて、全ての出版物を、検閲、調査、分析して、その資料を、引き揚げる時にプランゲ博士という人が持つて帰つてい

ました。プランゲ博士は歴史家で、検閲をしていたGⅡセクションのチーフです。メリーランド大学で四十数年間勤められ、日本の戦後の状況を全部分析していた方です。

ちょうど私は、国立の「国際子ども図書館」を造るといふプロジェクトに関わつていました。国際子ども図書館ができた時に八千冊全部返してもらえれば、すごい資料になる。占領時代の資料が完璧に揃つてるなど、日本中どこ探してもない。もしそれが、国際子ども

占領下の子ども文化展特別講演会(抄録)

演題 「未来を信じたとき」

講師

松居直氏

福音館書店相談役

平成14年8月4日(日)  
午後1時30分～午後3時  
熊本県立図書館3階大研修室にて

図書館に収蔵され、日本の専門家が共同研究をすることができれば、本当にいろいろな事が分かつたんです。

その年の八月、ワシントンへ参りました。メリーランド大学では図書館関係の先生方が全部集まつていらつしやつて、八千冊の中からピクチャーアップした本も並べてありました。山中峯太郎の本も三冊出ておりました。『敵中横断三百里』など、大変軍国主義的な子ども向けの物語を書いていた作家です。その人が、戦後に書かれた本が三冊あつ

たんです。全部検閲で差し止められたんだと思いますが、もしこの本が日本にあれば山中峯太郎の戦前、戦中、戦後の移り変わりをちゃんと調べる事ができると思ひました。どこが戦後変わったのか、変わつてないのか。非常に重要な問題なんです。『聖書物語』も検閲で引つかかっているのがありました。確か村岡花子先生の本だったと思うんですけれども、本文ではなく、解説のところがか引つかかっている。占領軍が、非常に細かく見ていたことが分かります。

した。そしてその時、私は、歴史家としてのプランゲ博士の偉さをしみじみと思つたんです。

戦後、私は『こどものとも』という月刊の絵本を編集し始めました。日本の子どもたちに、外国の文化、特にアジアの文化をちゃんと伝えるということとを編集の一つの柱にしておりました。そこで、まず朝鮮半島の物語を日本の子どもに紹介しようと思ひました。岩波の少年文庫に金素雲先生の翻訳「ネギをうえた人」がありましたので、朝

鮮半島の自然や人間、文化を絵に描ける画家を探しました。しかし一人もいません。朝鮮半島を三十六年間も植民地にして、その自然も描けない、人間も描けない、その文化も見えないし、勉強していない。「一体これは何だ」と感じました。朝鮮半島だけではありません。中国でもタイでもフィリピンでもそうです。ところが、アメリカは、プランゲ博士は、これだけのことをちゃんとやつていらっしゃるんです。私たちが第二次世界大戦の時に、占領したり統治したりしていた事実は、一体どういう意味を持つんだらうかと、しみじみと考えさせられました。

私は十八歳の時に戦争が終わり、戦争中はただ「死ぬ」ということのために生きていました。その頃の日本の男の子はみんなそうでした。二十代で兵隊になつて死ぬんです。運命とかじゃない、それが義務です。そういうものだというのをそれまでの十八年間、私は教えられました。私が五歳の時に満州事変が起こります。そして朝鮮半島を三十六年間統治し、アメリカと四年間戦争したんです。私は、死ぬはずだったんです。「死」こそが最大のテーマだったんです。「死ぬ」ってこの意味を疑つたわけではないんだけど、納得しなかったんで、戦争中色々な本を読みました。本居宣長も平田篤胤も会澤安(正志斎)も読みました。日本の

国粹主義の歴史から秋山謙蔵さんの本はほとんど読んでいましたし、磯部忠正の『皇道哲学・絶対随順の論理』も工場で働きながら読みました。そして、ある日、戦争が終わったんです。何の感慨もありませんでした。喜びなんかどこにもありませんでした。「ああ、そう」そんな白けタ感じでした。

それから、三日ほどした夜、散歩に出ました。いつも行く古本屋さんの傍まで行ったら、煌々と電気をつけて営業しているんです。その時に「ああ、戦争は終わった」と思いました。灯火管制ではなくて、古本屋さんが、夜電気をつけて営業している。私は、すぐに入りました。本棚には戦争中にはなかった本がズラーツと並んでいる。一番、私が興味を持ったのは、『大トルストイ全集』でした。私は徳富蘆花が大好きで、蘆花の本はほとんど買って集めておりました。その蘆花が『順礼紀行』という本に、日露戦争の直後、ヤスナヤボリアナのトルストイ伯爵の館でトルストイと会って平和について話したことを書いています。それで、蘆花が尊敬しているトルストイの二十二巻の全集がどうしても欲しいと思ひまして、家へ飛んで帰り親父に頼みました。私は、トルストイ全集に出会って、「生きる」ということを自分の問題として感じる事ができました。「生きるとは何か」「何のために生きるのか」「いかに生きるべ

きか」そういうことは、誰も教えてくれませんでしたけれども、トルストイはその事を私に伝えてくれたように思います。戦後、「生きる」ということが、私のテーマです。やがては、死にますけれども、それまでは生きなければならぬ。それが命を戦争によって失わなかった人間の使命ではないかと。

プランゲ文庫の中の色々な本に深く目を通しますと、みんな一所懸命生きようとしている。そして、「子どもたちへ、生きるということ」をどのように伝えていったらいいのか」と真剣に考えている、という気がします。

同志社大学に入りました時に、一番辛かった事は、何にも知らないってことでした。アメリカと四年間戦争して、アメリカの事を何も知らない。中国と十五年間戦争して、中国の古典は知っていても、現在の中国の事は何にも分かってない。そして三十六年



間の朝鮮半島のことをほとんど知らない。それで、私はアメリカ史を少しかじるようになって、当時出ていた朝鮮半島の歴史をほとんど読みました。ハングルでは今、子どものことをオリニといいますが、オリニという言葉は、方定煥(バン・ジョンファン)という童話作家が一九二〇年代に創った造語で、子どもの人格を認める「子ども様」といったニュアンスの言葉です。方定煥は日本で勉強された方で、独立運動にも関わりのある方ですが、『オリニ』というハングルの子供向け雑誌を創刊し、『愛のおくりもの』という朝鮮半島

では最初の童話集を出版します。本方に子どものことを考えた運動をされた方です。『オリニ』はしょっちゅう発禁にあうんですけれども、十二年間続くんです。しかし一九三四年にとうとう発禁になってしまいました。以後、日本の統治が物凄く厳しくなるんです。中国もそうです。現在の中国の子どもの本は確かに遅れておりますが、一九二〇年代までは日本と変わらないレベルまで行つてたんです。『小朋友』という月刊誌が、上海で出ているんですけれども、魯迅も執筆している素晴らしい雑誌です。ところが、日本と戦争が起き、上海や北京の出版界は壊滅してしまいます。中国の出版や子どもの本が遅れているということは、そのためなんです。中国の素晴らしい子ども

の本の基礎を全部崩してしまつたのが、「私だ」と私は思いました。これがもう一度再建されるのに何が出来るかということを考えていかなければいけないのです。余計、プランゲ文庫がかけがえのないものであると、私には思えるんです。

歴史的な資料価値をどう見るかという事が、それぞれの時代の人間に問われているわけです。プランゲ文庫の子どもの本は、七〇八五冊あるわけですが、編集を通して、戦前・戦中・戦後の屈折した気持ち、どのようにこの本の中に現れているのか、そして、戦後にどんな希望をもっていたのか、何を次の子どもたちに託そうとしていたのかということ、この文庫を通して本当に知りたい。同時に、本作りの奥に潜んでいる、その人たちの志、憧れ、理想、そういうものを何とかして読み取りたいと思います。

『敗北を抱きしめて』という本で、戦後の日本のことが、非常によく書いてあります。ちよつと長くなるんですけども、読みますと「すなわち、日本占領の最も悪質な点の一つは、帝国日本の略奪行為によって最も被害を受けたアジアの人々が、この敗戦国でまともな役割・影響力がある立場を何ら獲得できなかった事であった。これらのアジアの人々は、目に見えない存在となつてしまつた。太平洋戦争にお

ける

るアメリカの勝利に、全ての焦点があたってしまったために、日本帝国の陸・海軍人を打ち負かす上で、アジアの人たちが成し遂げた貢献はなかったかのごとくに見えなくなってしまう。これと同じ消失のメカニズムによって、戦争中だけでなく、植民地時代にアジアの人々に対してなされた数々の犯罪にいたっては、いっそう容易に、まるでなかったかのようにみなされた。」というような問題提起をしているんです。戦後の日本人のメンタリティーについても、かなり深く突っ込んで書いておられますし、カストリ文化等についても相当な頁数を割いています。こういうものも合わせて、このプランゲ文庫というのを考えていかなければならない。もう一度戦後の日本の一つ一つを検証する時に来ているのではないかと思っております。

アメリカ史をやっていたお蔭で、どういう時代にどういう経路でこのアメリカの絵本が出たのか、その背景が非常によく分かるようになりました。バージニアリー・バートンの『ちいさいおうち』を、初めて岩波書店がお出しになった時に、「あ、アメリカ史が書いてある、子どもの本にちゃんと歴史が書けるんだ」と思いました。『ちいさいおうち』は畑にぼつんと一軒建っております。日本にしろヨーロッパにしろ、農村というのは「村」を形成し

ています。アメリカにはそういう集落がないんです。全部ばらばら、一戸建て。『大草原の小さな家』もそうです。あれは、アメリカ史を知っているとよく分かるんです。十九世紀に、五年間その土地に住まなければ自分のものにならないという法律ができたんです。それで、みんな自分の土地に移るからばらばらになる。だから、通信販売が発達するんです。

歴史的背景を知りますと、その本の成り立ちや、何をアメリカの子どもに伝えようとしているのか、ということが分かってきます。アメリカの民主主義を日本が戦後受容した仕方も、あの八千冊の本を克明に読めば分かると思えます。誰がどういう形で受容し、誰がどういう形で批判を持っていたのかも、あの中に書いてあると思います。

もう一つ、あの資料に興味ひかれるのは文体論です。日本の戦後は文体が激変する時期なんです。「歴史的仮名遣い」から「現代仮名遣い」へ。当用漢字も出てまいります。そして、左から右へ書くようになります。一九四七年からです。句読点、送り仮名のつけ方も興味があります。絵本は字空きや句読点は非常に重要ですからね。造本の仕方印刷のことも興味をひきます。ルーペで見ますと色んな印刷を使っていると思うんです。あの時代、印刷工場がほとんど壊滅している中で、どういう方法

で製版し、印刷し、どういう活字を使っている、紙はどうしていたのか。製本はどうだったのか。そういうものも含めて研究をしなければなりません。一九四五年にCIEE図書館が開設されます。アメリカ文化センターです。アメリカらしいですね、図書館を作っている。十月に、広島図書館株式会社が、学

年別の雑誌『銀のすず』を創刊します。原爆の後、一番早く広島で子ども雑誌が出たということです。翌四六年一月に、大阪で、保育絵本の『ひかりのくに』が創刊されます。幼児向けのものが、最初に発行されていくんです。これは、当時日本人たちが幼児教育から将来を再建していこうと考えていた、そういう志の現れではないだろうかと思えます。四月には児童雑誌の『赤とんぼ』が創刊されます。

この頃から、実はGHQは翻訳出版の手續きについて非常にしっかりとしたマニュアルを出します。日本の出版社に。翻訳出版をどういうふうにするか、翻訳権をどういうふうに考えるか、という考え方を、日本の出版界は取り入れるんです。

そして、敗戦の翌年『新潮』四月号に坂口安吾が「墮落論」を書きますね、引用してみます。戦後の思想の一つの典型です。「人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救ふ便利な近道はない。墮ちる道を墮ちきること

によつて、自分自身を発見し、救はなければならぬ。政治による救ひなどは上皮だけの愚にもつかない物である。」言ってみればものすごく前向きな考え方ですよ。生きようとする意思の現れです。そして、その後、総選挙が行われたり、婦人参政権が認められたり、東京裁判が始まります。

その一九四六年の八月に、フレール館が、観察絵本の『キンダーブック』を復刊されるんです。戦争末期は、もうこういう雑誌は全部無くなってしまつた。それを、いち早く、『ひかりのくに』は創刊ですが、『キンダーブック』は、復刊をされます。その復刊の第1集第1号が、「ムギ」という号なんです。毎号、特集をしていました。実は、創刊号は「コメ」です。戦後は、お米なんかないですからね、みんなムギを食べてたわけですから。最後に折り込みみたいなチラシが入っておりますね、「次号予告」が書いてあったんです。「再刊第1号『ムギ』の巻に、続く第2号『ウミトコドモ』の巻が、今素晴らしい出来映えをもって印刷中です。ごとうたる印刷機械の雑音の中から、あの美しい絵本が次から次へと出来上がっていく有様を、皆さんも想像しながら一日も早くお手元に届く日をご期待ください。皆さんのフレール館編集部」と、書いてあるんです。印刷機械からあの刷りのものが出て来

る目も覚めるような思いを、工場の人も編集者も皆しただろうと思うんです。あの頃の編集後記をもう一度読んでみてくださいと、その時の人々の気持ちがいじみじみと伝わって来るんです。活字というのはすごいもんですね。

その年の九月、国語審議会が充足して、当用漢字と現代仮名遣いが出てきます。ちょうどこの頃に、『思想の科学』が出たり、桑原武夫先生の『第二芸術論』が出たり、アプレゲールという言葉が流行ったりします。少年少女雑誌もその頃から、『銀河』とか『赤とんぼ』とかが出てくるわけです。敗戦の翌年の秋、一斉に子どもの本に対する、日本人の希望と熱意が燃え上がってくるように感じられます。

四七年四月から、六・三制になり義務教育が無償になります。男女共学です。五月には日本国憲法が施行されます。この頃の資料をみますと、四六年は手探りの状態で、四七年でようやく光が見えてきた。自分たちの足でやっつけていける、立っていけるという気持ちを、出版人も持つようになったんだなあということがわかります。しかし、思想も社会も教育制度も全部変わっていくわけですから、ものすごい試行錯誤の時代だったんじゃないかと思えます。恐らく、その時代の人は、生き残った者として、生きなければならぬだけだけれども、「生きる」ってのがわかり

ません。死ぬはずだったんですから。この本をばらばらと見ておりますと、生きなければならぬんだという感じを、感じるんです。

一九四八年二月九日、東京に国立国会図書館ができます。元の赤坂離宮で、金森徳治郎先生が館長をしてらっしゃいました。その国立国会図書館がモデルにしたのが、アメリカのライブラリー・オブ・コングレスです。

一九四八年九月二十日に、『美しい暮らしの手帖』という新しい雑誌が創刊されました。その創刊号の後書きに「ふりかえってみると、こんなに、たのしい思いで本を作ったことは、これまでにでもありませんでした。いく晩も、みんなで夜明しをしましたし、そうでもない日も、新橋の驛に、十時から早くつくことは、一日もないくらい、忙しい日が續きましたけれど一頁ずつ一頁ずつ出来上つてゆく、うれしさに、すこしも、つらいなどは、思つたこともありませんでした。

この本は、けれども、きつとそんなに賣れないだろうと思えます。私たちは貧乏ですから、賣れないと困りますけれど、それどころか、何十萬も、何百萬も賣れたら、どんなにうれしいだろうと思えますけれど、いまの世の中に、何十萬も賣れるためには私たちの、したくないこと、いやなことをしなればならぬのです。この雑誌を、は

じめるについては、どうすれば賣れるかというところについて、いろいろのひとにいろいろのことを教えていただきました。私たちには出来ないこと、どうしても、したくないことばかりでした。いいじゃないの、数はすくないかも知れないけれど、きつと私たちの、この氣もちをわかつてもらえるひとはある。決して、まけおしめでなく、みんな、ころから、そう思つて作りはじめました。でも、ほんとは、賣れなくて、どの號も、どの號も損ばかりしては、つぶれてしまうでしょう。

おねがいします、どうか一冊でも、よけいに、お友だちにも、すすめて下さいませ。」って書いてあるんです。雑誌を出すときにはこういう気持ちだと、とっても共感しました。売れるか売れないかまだ分からない。しかし、「売れる」と思つて発行したわけですね。そこに、理想だとか憧れとか志とかがあるわけですね。花森安治編集の『暮らしの手帖』は、もの凄く成功したわけですから先賢の明があつたということになるだろうと思えますが、過去のいろんな人たちの仕事というのは、丁寧に見ていった時に、学ぶことや励まされるのがたくさんあるんです。

その後、『ビルマの罫紙』が出たり、国立国語研究所が設立されて、日本の言語表記を根本的に研究しようという体制が整つてまいります。そして翌四

九年の一月に小学館が『幼稚園』を創刊されます。保育とか幼児教育に對した戦後たくさんの人が関心を持っていたというのが、この出版物を見るとよくわかるんです。小さな子どもの時から、もう一度教育を再建しようということなんです。こういうところの日本人のセンスは、すごいという感じがいたします。この十月に、占領軍による検閲制度が廃止され、検閲がなくなります。占領軍の検閲を見て、プラグマチズムの反映だろうかと思うんですけども、かなり客観的な判断を持つて検閲をしていたと思われまます。もちろん検閲ということ自体は、私は決して賛成はいたしません。

今後日本の子どもたちには、共生し、お互いに理解し合つていくということが求められるだろうと思えます。少子高齢化という言葉は分かっているんですけども、高齢化がどういう意味を持つのか分かっていない。あの子どもたちが成人をして生きていく時に、誰がお米を作るんでしょうか。誰が道路を造つたり補修をしたり、鉄道の補修をしたりするんでしょう。誰がゴミを集めるんでしょうか、工場では誰が働くんでしょう。ドイツやフランスやイギリスと同じ事ですね。移民ということになります。当然、家族が来る、子どもが来る。そうすると、子どもたちの教育から福祉から考えていかなければ

ばならない。全く違った文化を持った人たちと、どういう風にして生きていくのか。私たちは、その時に生きていく子どもたちに、今、何を伝え、何を教育してるか。非常にぬかっていると思います。

そういうことを、一番見事にやっているのがオーストラリアとカナダです。「多文化主義」を政策に掲げ、見事に実践しています。カナダの子どもの絵本をご覧になりますと、どれほど多文化主義かということが分かります。色々な国の文化がちゃんと子どもに伝えられるように作られています。中国の昔話や、歴史、中国の人たちの生き方、現在の移民として来ている人たちの様子や、客家ハッカの人たちの暮らしも分かるような絵本があります。客家というのは、中国人ですけれども独特の文化を持った人たちですね。代表的なのが孫文、鄧小平。カリブ海の本や、東ヨーロッパの文化の本、ユダヤ系の人の本もちゃんとあります。「パストナー」(「超越し」の祭)というユダヤ教最大の祭を扱った本もありました。ユダヤ教の人たちが日常どうい生活をしてるのかということがちゃんと書いてある。たくさん売れるわけではありませんが、子どもたちの将来のことを考えて、カナダの出版社がちゃんと多文化主義の工夫をしてる。日本人が出てくる本もあります。戦前・戦中

日本の移民がどう収容されて、どのような目にあつたかということが、きちんと絵本になって出ています。

私たちは、今、何を子どもたちに伝えていかなければならないのかということも、もう一度考えなければいけないと思います。占領下、多くの編集者たちが、未来を信じて子どもの本を作りました。今、私たちは、「生きる」ということを子どもたちに伝えていくのかを、戦後のあの本から突きつけられているような気がしております。人間には、生きるときにプラスとマイナスのモデルがあります。私たちは物語や小説を読んで、「こういう風にはなりたくないよ」「これは良い」と思うんです。しかし、今の子どもたちには年を取ったときのモデルがありません。そういう本を子どもの時に用意しておかなかつた。「これはしまった」と思っています。生身のおじいさんやおばあさんには、核家族でほとんど接触がありません。隣近所の家にはしても、子どもたちはただそれだけ。声も掛けないんですよ。そして、私たちは高齢者の方たちを「福祉」という名で隔離している。日本には「高齢者の人を大切にする」とか「年を取るといこと」はめでたいことだ」という考え方がありました。今は、それがほとんどない。

私は、日本で出ている、翻訳書も含めて、おじいさんおばあさんが出てくる絵本を全て調べて貰ったことがあるんです。圧倒的に翻訳書です。日本のオリジナルで、おじいさんおばあさんが出てくる本は少ないです。自分たちも、おじいさんおばあさんになるにも関わらず、子どもたちはほとんどその事に、イメージもなければ背景もない。こういう問題は、非常に重要な問題として出てくると思います。

沖繩のおばあは本当に生命力があります。本当に生きてらっしゃる。だから、ああいう人をモデルにした物語を書いて欲しいと、いつも言っているんです。去年、行きましたら、沖繩の方が『沖繩おばあ烈伝』という本を私にくださいました。そういう方と一緒に、子どもたちがこれから生きていく文化をどう創り出していくか、ということも考えていきたい。ああいう過去のものを見ますと、つくづく教えられるんです。

松居 直(まっつい・ただし)氏  
一九二六年京都生まれ。同志社大学法学部卒。五年福音館書店創業に参画。絵本の編集に携わり六八年社長になり、八五年会長、九七年相談役に就任。六五年絵本「ももたろう」でサンケイ児童出版文化賞受賞。他受賞多数。「国際子ども図書館」を考える全国連絡会会長。NPOブックスタート支援センター理事長。子どもの読書推進会議副代表他。著書に『絵本とは何か』『びかくんめをまわす』  
『だいくとおころく』他多数。

**\*文学館のごあんない**

**所在地**

熊本市出水2丁目5番1号  
(熊本県立図書館併設)

電話(〇九六)三八四一五〇〇(代)

**開館時間**

午前9時30分～午後5時

**休館日**

月曜日・毎月末日

年末年始・特別整理期間

**入場料**

無料

**最寄りの交通機関**

(1)市電Ⅱ「市立体育館前」下車・徒歩5分

(2)バスⅡ「水前寺公園・県立図書館入口」下車・徒歩5分

**熊本近代文学館友の会会員募集中**

この会は文学に関心のある人々の自主的な集まりです。

熊本近代文学館を核として、文学愛好者の大きな輪を作りたいと願って組織するものです。

詳しくは熊本近代文学館受付へお問い合わせ下さい。

熊本近代文学館報 第62号
平成15年1月31日発行
編集発行 熊本近代文学館
〒862-8612 熊本市出水2-5-1
電話 384-5000(代) (096)
FAX 385-4214 (096)
14 教委 熊図
③ 002-2